

4月から

友好都市提携 北海道奈井江町と再締結

市は、北海道奈井江町と旧成羽町が昭和57年に締結した友好都市提携を、市町村合併により「高梁市」が誕生したことから、このたび、改めて締結しました。

2月22日、秋岡市長、長原議長が同町を訪問。同町の北良治町長、笹木正男町議会議長とともに、協約書に署名し、今後のさらなる交流と連携を確認しました。

奈井江町とは、小・中学生の相互派遣など、教育・文化をはじめとする各分野での積極的な交流が図られています。

奈井江町は、道央空知の中心部、石狩平野のやや北部に位置



調印式の様子

し、町の面積は88.05km²。人口は約6800人です。

町名の由来は、アイヌ語で「砂多き川」を意味する「ナエ」が転訛したものだ。

「思いやり明日へ」をテーマに、保健・医療・福祉に重点を置いたまちづくりを進めています。また、鉄道・道路の交通網が充実しており、生活環境や流通、企業立地などの面にも恵まれた地域です。

「助役」の呼称を「副市長」に変更、 新たに「会計管理者」を設置します。

地方自治法の改正により、4月1日から、「助役」の呼称が「副市長」に変わります。

また、収入役制度の廃止に伴い、新たに「会計管理者」を設置します。

なお、高梁市公金口座の名義が次の

とおり変更になりますが、これに伴う事務手続きは不要です。

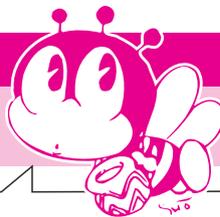
▽変更前：高梁市助役

▽変更後：高梁市会計管理者

■問い合わせ 総務課行政係 (TEL) 210

205)、会計課 (TEL) 0271)

マナビイ通信 その④



全国生涯学習フェスティバル
マスコットキャラクター
「マナビイ」

協賛事業を募集しています

対象事業 9月1日(土)～12月9日(日)に、県内で行われる講演会、講座、発表、展示、コンクールなどのイベント。

協賛の内容 「第19回全国生涯学習フェスティバル協賛」、「まなびピア岡山2007協賛」の冠名称を付けたイベント実施。

協賛の特典 ①フェスティバルの大会ガイドブックやホームページでのイベント内容の紹介。
②イベントのチラシ等でのロゴマークの使用・表示。

留意事項 登録は無料。
ただし、事業実施に対する経費助成はありません。

登録申込期限 ▷第1次…4月15日(日) ▷第2次…6月30日(月)

申込方法 郵送、FAX、Eメールで申込書を提出してください。
ホームページからも申し込みできます。

申込先 第19回全国生涯学習フェスティバル実行委員会事務局
〒700-0824 岡山市内山下2-5-7丸の内会館
TEL086-221-5530 FAX086-221-5560
Eメール manabipia2007@pref.okayama.lg.jp
ホームページアドレス
http://www.pref.okayama.jp/manabipia/

■問い合わせ 社会教育課生涯学習係 (TEL) 9083)

皆さん、こんにちは。マナビイは、11月開催の第19回全国生涯学習フェスティバルのPRで、あちこち飛び回って大忙し。見かけたらぜひ声をかけてね。
さて、県実行委員会では、フェスティバル開催を盛り上げるため、現在、協賛事業として登録してくれるイベントを募集しているんだ。
今回はその内容をお知らせするね。



開催期間：平成19年11月2日(金)～6日(火)

留岡幸助 ⑤ 最終回

家庭学校と共に

明治32（1899）年11月、35歳の留岡幸助は東京の自然林に富む巢鴨村に念願の家庭学校を創立した。翌年生徒一人、教頭一人、校長とその家族での出発である。この一人の生徒を可愛がっていた妻夏子は4月に34歳で亡くなった。その悲しみを乗り越え、校舎建設の寄付金集めに奔走、次々と家庭舎が建てられ、生徒も増加していった。

家庭学校では多くの課題を持った8〜16歳の少年を受け入れ、生活を共にして指導する。日課は5時半起床、6時礼拝、8〜12時授業、13〜17時作業、夕食、休憩の後自習し20時就寝となる。感化教育の三要素として、よく働き、よく食べ、よく寝ることを実践した。教師と生徒の共同生活は苦闘の連続で、さぼり、うそつき、脱走など、身についていた悪癖を持つ子と闘う毎日であった。

その一方で、敷地内に苦学生を援助する思斉塾や教師養成の慈善事業師範部も併設した。

明治36年から半年程、社会事業視察のため渡欧し、先進国の監獄制度、感化事業を学んで帰っている。明治38年には、月刊誌「人道」を創刊、病に倒れるまでの27年間、社会問題、感化教育の大切さを

論じ続けた。大正2（1913）年、創立十五周年記念式を徳富蘇峰など多くの援助者を招いて盛大に行った。この年までに入学者は230名を数え、そのうち退学者32名、逃亡23名は出たが、約7割の改善率を果たし、無事社会に出て活躍した人が119名という成果を見た。この経験から強い自信を持ち、「宿願の新農村の建設と感化事業に余生を捧げた」と雄大な事業に着手する。大自然は人間を育ててくれると確信、北海道を選んだ。



留岡幸助の著作の一つ「家庭学校」

論じ続けた。

大正2年9月、土地選定のため北海道に旅立ち、北海道・遠軽の地に広大な千町歩余りの原野（社名淵七百五十町歩、白老三百町歩）を四千三百円余りで払い下げを受け、感化農場を開拓経営する。

家庭学校教師の鈴木良吉（東北大、農出身）と生徒3人は先遣隊として出発、一軒の小屋を作り幸助を待った。鈴木は幸助が連れてきた姪の吉田けいと結婚し、この地に根を下ろす。大正3年8月24

日、近隣の人々に来てもらい、原野で家庭学校北海道分校の開場式を行う。未開の原野で野ねずみ、蜂と戦って土地を開いていった。

大正8年、礼拝堂が竣工、これを中心に掬泉寮など家庭で学校の寮校舎が成立、農具舎、牛舎などの新農場施設も作られる。周辺には小作地が広がる。幸助は小作人を入れた新農場を作り、その収入で家庭学校の生徒を育てる計画であった。

大正11年、家庭学校の開墾地は二百三十町歩、乳牛30頭でバター・チーズの生産、百町歩の山林への植林も始まる。生徒は自然と労働の中で

人間性豊かに育ち、悪さをする生徒は東京に返すと言ったらおとなしくなったという。

昭和6（1931）年、巢鴨の家庭学校で行われた奉教五十年の感謝会后、幸助は2度目の脳出血で倒れ、7月に巢鴨の土地は売却、家庭学校長を牧野虎次にまかせ、名誉校長となったが、昭和9年2月5日、70歳で天国に旅立った。

高梁の地に育ち、神の愛に救われ、多くの人々の支援を得て、人々を悪から救おうと監獄改善から感化事業へと進んだ。家庭学校を始めて、一路白頭に到るまで努力した人生であった。

（文・児玉 享さん）



北海道家庭学校の礼拝堂